

手強い現代版「空気」との戦い

京都大学防災研究所
教授 矢守克也



1. 「空気」さんが言っている

山本七平著『「空気」の研究』に関する解題の中で、大澤（2018）¹⁾が、「空気」について、こんな例を披露している。その先生のことを優秀だと個人的に思っているという人にはほとんど出会わないのに、公式の場では一番優秀だということになっている先生、そんな先生に心当たりはありませんか。それこそ、まさに、「空気」さんが優秀だと言っている先生です— こういう思わず苦笑いしたくなるような例である。

宮本論文は、この意味での「空気」の存在や、その影響力を見抜き、それを変化させることが今後の復興研究の鍵を握っていると主張する。同論文が指摘する3つのケースをはじめとして「空気」が現実の復興を停滞させたり、復興に関する私たちの考えを狭めたりしているのを見るにつけ、これは非常に的確な認識であり、かつ重要な問題提起だと思う。

「空気」は日常用語でもあるので、多義的で曖昧である。大澤（2018）による分析にならって、その根幹的性質を5つ取り出しておこう。第1に関係者のあいだでシェアされる、第2に普遍性がない、第3に一枚岩である（両論併記にならない）、第4に個人の判断から独立している、第5に明示されない、以上5つの性質である。たとえば、「あの先生は優秀だ」の「空気」は、先生の周辺の「関係者」にシェアされている。しかし、所詮、関係者限定という意味で空間的に限定され、過去はそうでなかったし未来はわからないという意味で時間的にも限定されているので、「普遍性」はもたない。また、たとえ、「あの先生、実は大したことない」などと「個人の判断」を別にもっていたとしても（実際、みんなそう思っている）、それをだれも決して口にしないという意味で「一枚岩」であり、かつ、「空気」の内実が「今、こういう

『空気』です」などと「明示化」されることはない。「空気」は、あくまで空気として、明示化されないままに、しかし関係者を縛り続ける…。

『「空気」の研究』は、著者の戦時体験などをベースとして、1970年代に刊行されている。刊行時点から数えてもすでに半世紀、「空気」にも変化が生じていると考えるべきであろう。宮本論文を深く理解するためにも、また、その先に進むためにも、ここでは、そうした変化について、「空気が読めない」と「悪しき両論併記」をキーワードに私見を述べてみたい。

2. 「空気」が読めない

「KY（空気が読めない）」が、流行語になったのは2007年のことだった。こんな言葉が流行るのは、少なからざる人びとが「空気」を読むことに困難を覚えているからである。他方で、『「空気」の研究』の出版時には、KYなどという言葉はむしろ存在せず、「空気」は「明示されないのに、曖昧でわからないということがない。『空気』の中で生きている人にとって、『空気』がなんであるかは極めて明晰にわかっている」（大澤，2018，p.109）。これが、「空気」なるものの大前提だったはずである。

中でという部分が重要である。内部にいる限り、「空気」を読むのに苦勞はいらない。だから、KYが社会現象にまでなったのは、現代日本では、様々な「空気」群が— 山本が立論した頃に比べると— より多く乱立併存し、頻繁に接触していること、つまり、不慣れた別の「空気」の中に放り込まれ、「ここでは私はどう振る舞えばいいの？」と忖度する経験が増加していることを意味する。このトレンドは、言うまでもなく、社会全域を通貫する普遍的な理念の弱体化、価値観の多様化といった社会の動向とシンクロしている。

「空気」は時空的に限定されているのだった。特に、現代社会では、「空気」の時間的継続性が短く、また空間的被覆性が弱い。「空気」のすぐ傍に別の「空気」が控えていて、島宇宙の様相を呈している。しかも、お隣の「空気」が正反対の意味内容をもつ場合も多い。なぜなら、「空気」はもともと、個人の判断からの独立性という性質をもっている。「あの先生、大したことない」という個人の判断は「空気」によって抑圧されているだけで、厳然としてそこにある。この抑圧されたものが、別の「空気」の塊として外部に投射されれば、「優秀だ」と「大したことない」の2つの「空気」が併存する状況が誕生する。

こう考えると、宮本論文が提起する「オンリーワンの空気」について、次のような見方も許されるかもしれない。それ単独ではなく、「横並びの空気」なり「ナンバーワンの空気」(たとえば、人口回復率という「ものさし」上でよき序列を!)なり、それとは一見対立的な「空気」たちと群雄割拠している点に、問題の根幹があるのではないか。別言すれば、「オンリーワン」を賞賛する「空気」が局所的に存在するのは事実としても、それ自体が、すぐ傍らに控える対抗馬たる「横並び」や「ナンバーワン」からエネルギーを供給してもらっている(逆も真なり)可能性が高い。

3. 「悪しき両論併記」

一方で、「世界に一つだけの花」と高らかに歌い上げていくせに、他方で、それはそれとして、肝心なところではしっかり勝ち組に入るために血道をあげる。不協和を起こすと思われる2種類の「空気」が、同じ社会において、また、一人の人間において、矛盾なく奇妙に同居している。仮に、これが現代的な「空気」の特徴なのだとしたら、それは、いったいどのようなメカニズムによって生じているのだろうか。

『「空気」の研究』は、「水を差す」ことが、「空気」の解体・変革にとって重要だと指摘している。「水を差す」とは、言い換えれば、ある「空気」が内部に閉塞せずに、外部の「空気」と接触することである。こ

の点に徴する限り、「空気」の現代の特徴、つまり、複数の空気の島宇宙は、「空気」のベターメントによって本来ポジティブに働くはずである。

ところが、そうは問屋がおろさない場合がある。その鍵を握ると思われるのが、宮本が別の著作で指摘する「悪しき両論併記」というメカニズムである(宮本, 2019) 2)。先述の通り、「空気」は、本来、「両論併記」とはなじまない。2つの考えがまっとうに両論併記されていれば、そこに「空気」は生じない。また、仮に「ナンバーワン」が伝統的な「空気」だとして、「オンリーワン」という別の「空気」に正面から接すれば、互いがよい意味で揺らぐ可能性がある。

しかし、「悪しき両論併記」は「両論併記」とは異なる。それは、たとえば、「オンリーワンをむげに否定するわけではないです、実際、『世界に一つだけの花』は、私も好きだったりします」とする「ナンバーワンの空気」、あるいは、「ナンバーワンを頭ごなしに拒否するわけではないです、実際、背に腹は代えられないときもありますから」とする「オンリーワンの空気」、または、この両者が合体した「空気」と結託している。この種の「空気」は、見かけのダイバーシティを最初から組み込むことで、「一枚岩」を揺がす外部性に対する防御力を大幅に向上させている。最初から水が差されているので、差し水の効き目も小さい。手強さは、「空気」のコンテンツ(たとえば、「閉塞感という空気」)からではなく、メカニズム(「空気」の作動のし方)から来ているのだ。

宮本論文は、「被災地の『空気』を吸いながら探求していきたい」と結ばれる。「読む」ではなく「吸う」とした点に、「空気」の変革への著者の意気込みを感じる。「空気」からの解放のためには、まず「空気」に包まれてみるものが不可欠だからだ。この鉄則の大切は、現代版「空気」に対するときも変わらない。

参考文献

- 1) 大澤真幸(2018), 山本七平『「空気」の研究』, 100分de名著「メディアと私たち」, NHK出版, pp.87-126.
- 2) 宮本 匠(2019), 人口減少社会の災害復興の課題—集合的否認と両論併記—, 災害と共生, Vol.3, No.1, pp.11-24.